『哲学詩集』第二回

トンマーゾ・カンパネッラ著
澤井繁男訳

9　自己愛についての驚くべき発見

自己愛のせいで人間は軽信となり
万有も星も、みなぼくたちより強くて美しいにもかかわらず、
感覚も愛も持たないとされて、
ぼくたちのためにだけ回転していると信じられてしまっている。
　さらにそのため、ぼくたち以外のほかの者たちは野蛮で無知であり、
神はその者らを見つめず、
聖職にある者だけに目を向け給うとその者たちは信じて、
とうとう自己愛に陥ってしまう。

労苦を厭うて知識を避け、
世界が自分の思いに叶わないと見るや、
神の摂理、もしくは神の居給うことすら否定する。
こうしてひとは狡智を知とはかって背徳者となり、
ひとびとを支配しようと新たな神々を創る。
ついに自己を宇宙の創造主と断言してしまう。

〈解題〉

「8　世界の諸悪の根源」の最終連で断罪された〝盲目的自己愛〟をくわしく詠んでいる。第一連で、星も含めて森羅万象に感覚がない、と信じ込ませる自己愛を批判していることからも、カンパネッラの汎感覚主義が強く打ち出されている。

第四、五連は、〈申命記〉第四章19を下敷きにしていると思われる。つまり、「また目を上げて天を仰ぎ、太陽、月、星といった天の万象を見て、これらに惑わされ、ひれ伏して仕えてはならない。それらは、あなたの神、主が天の下にいるすべての民に分け与えられたものである」と。

10　自己愛と普遍的愛を較べて

この自己愛には嫌気がさすものの、
生きんがためやむをえず、ひとは、思慮深く、善良で、勇敢であるふりをする。

この三つの装いのせいで身の破滅を招き、ついに改心するのである、
（誉れは純粋な言葉にあり、黄金は輝くけれど、ひとの辛苦は隠せず、むなしいもの！）
　他人の徳に感ずる嫉妬心は、自己批判のかたちで還ってきて、
屈辱、破局、労苦へと自己愛を公然と貶（おとし）め、焙（あぶ）り出してしまう。
それに反して神の普遍的愛にいたっているひとたちは、ひとびとをみな兄弟とみなし、
神とともに善なる歓びにひたる。
　聖フランチェスコよ、
あなたは、魚や小鳥をも同朋と呼び（おお、これを知るひとこそ幸いかな！）、
ぼくたち凡人とちがって、
　あなたはいつもにこにこして、
気がつけば、動物たちの言葉にも耳を傾けている。

〈解題〉

「9」に続いて自己愛 proprio amore を論難するにあたって、神の普遍的愛 comune amore を持ち出してきて、後者を、聖フランチェスコを例に称えているソネットである。カンパネッラは、革命を企図するくらいの人物だから、自己愛が嵩ずるとやがて国家間での「嫉妬心」を煽り、戦いがはじまって国が滅ぶ原因になることを、この詩に暗に託している。

一方、普遍的な真の愛とはまさに神の愛であって、国より世界を、換言すれば、自己よりも故国を価値あるものと

見ている。聖フランチェスコを登場させることは、聖人の生き方が、文字どおり、権力でなくて愛と純真のためだったからである。

11　至上の善である神を愛さず他の善を愛すのは、無知に理由がある

神がぼくたちにいのちを授けて下さるなら、
それを保ち、善行は神の御意しだいである、
だから神の愛でしか人間の心は燃え立たない、
　でも妖精（ニンファ）のほうが、男を手なずけるのはうまいだろうか？
哀れで傲岸な無知ゆえに、
神を冒（おか）し、善行でこじつけて神を売りわたす者は、
未知の事物に愛情を傾けず、
意気消沈して、精神的に卑劣になる。
　たとえ騙（だま）されても、真心はのこして、
相手にはわたさない、卑屈に従いもしない。
神はぼくたちに善の光線を垂れ、みなの行く手を照らして下さる。
　しかしぼくたちはひとを欺（あざむ）き、苦しみを与える（ああ、いまいましい！）
ぼくたちは実りある気高い希望も抱かず、
永遠不変の意味もわからずにうめている。

〈解題〉

表題中の「他の善」とは誤(あやま)てる宗教を称える善のことであろう。それは無知に原因があって、神を知らず愛してもいない。人間の善悪以前の問題である。カンパネッラの三つのプリマリタ（力、知、愛）の形而上学によると、これら三つは同価であり、神を知らずして神を愛する能力はない、とされている。したがって、「無知」の効能というものがあるとすれば、愛の目標は、死すべき卑しい事物を愛すように、人間を愛すことであろう。愛のめざすものは、不滅な、神的な恒久の美にあるのだから。

12　賢人であることの好運

大いなる好運とは、持てるもののなかで
最大なもの、叡智である。
賢人は満足ということをわきまえている人士を指す。
　彼らの出自は卑しいものだが、
生地の名を挙げる驚嘆すべき定めを負っている。
好運を求めて苦難を嘗(な)めると、名が知られ名声がとどろく。
殺されたときに、みなに崇拝される聖人になれたり神格化されたりするが、
歓びを浪費すると愚者におちぶれる。
　なぜというに、賢人には愉悦や倦怠は気晴らしにすぎないからだ。
恋人同士には歓喜と悲哀と思えようが、

妖精にとって、なんとそれは切ないことか。
　人生の困難な歩みは無分別な人間が背負う不幸で、
みじめな炎を消して、
悲しく歩んでいく。

〈解題〉

賢者や賢人が不幸であることはなく、さらにあらゆる不幸は彼らにとって好運となり、倦怠や歓喜も同様に好運のもとになっている。だが無知な者は不幸にみまわれるとすぐに乱脈となり、好運であっても以前よりも不幸になる。あらゆる出来事で愚鈍と無能振りを見せてしまう。

賢者と愚者の歩む人生や、好運と不運の関連を、「知」を第一義とするカンパネッラの立場から詠っている。

13　古代のひとたちのなかで賢者の知力を受け継がない思慮分別は、
　　狂人の狂気に屈する、ということ。

ある土地でかつて会った占星術師らが言うには、
人間どもが夢中になっている星位表が、健康人、次に負傷者を救(たす)けるため、
逃避の相談役を担ってきたという。
　その後統治者の館に戻って、
占星術師は狂人になるまえの生活習慣を称讃し

狂人どもを説き伏せようとした。
　でも彼らはみな耳を蝋（ろう）で固め、
拳（こぶし）を当てて訊く耳を持たなかった。
こうして賢人は、死を跳ねつけるため、
愚者どものしてきた生き方で生きようと努めた。
それは最悪の愚人が、支配者という過酷な任務に当たるからである。
　賢人たちは思慮分別をわきまえて独立独歩で生きてきた。
公（おおやけ）のまえでは他人の名をじっさい誉め称えながら、
狂人を装って過ちを犯そうとする。

〈解題〉

古代の賢人の寓話のなかに、わが身にふりかかった事件は、陰謀の最中やその後も、狂人の振りをするのが救かる道だとある。このソネットは革命蜂起が未遂に終わって獄舎につながれたカンパネッラが、最後の拷問の直後（一六〇一年）に詠んだものであろう。なぜならカンパネッラはずっと狂人を装って死刑をまぬがれ得たからである。

世界が悪のせいで正気を失っていく際に、賢人たちは、世界を改善しようと思いつつも、あえて狂人のような言葉を吐き、行ないをしなくてはならない、という逆説的な寓話が存在するのである。

14　人間は神や天使たちの舞台道具である

仮装の世界劇場では
肉体から出離した霊魂と、
肉体の想いの込められた霊魂こそが見せ場の究極である、
　自然や神の御業でも成り立っている、
この世に生を受けた者みなすべてには訴えるものがある。
舞台で作品が上演され、合唱がつぎつぎに続く。
　歓喜（コンメディア）と苦悶に身を包んで喜劇を書くことで、
運命の書が整えられる。
神が万民に歓びを与えるために満を持して書かれるもののほかは、
何も知りたくないし、認めたくないし、
したくもないし、耐える気力もない
　そのときついに舞台道具と化して悪行にいたった際、
仮装は大地や天空や海に戻ってしまって、
神におもねるひとが浮かび上がってくる。

〈解題〉

肉体が霊魂の仮装（仮面）であるとカンパネッラは主張している。肉体はいちばん大切な仕事をするのでなく、舞台上の人工的な役を果たすのである。

いろいろな仮装が馬脚をあらわしてくると、生きた光である神には、みなお見透しとなってしまう。負の想にかられる者は善行をするし、最後の審判に描かれる〈喜劇（コンメディア）〉の知識を待ったり、和解を必要とする者も現われたりする。〈世界劇場〉を持ち出してきて、人間界が一舞台であり、役者が人間だとすることで、それを統べる神の透徹した存在を意義づけている。〈コリント信徒への手紙一〉の第四章と第九章の内容を汲み取ると、神が役者として使徒を遣わした理由が、パオロをはじめとしてわれわれが、世界・天使・人間という役者になるためだから、となっている。〈世界劇場〉の〈世界〉はむろん〈宇宙〉と同義である。

15　人間とは、政治的支配の理法よりも偶然に従うが、
　　自然を模倣するのは稀である、ということ。

自然は、神のお導きにより、世界芝居を宇宙空間で成り立たせている。
そこでは、星や人間や動物たち、
それに諸々の事物がみな交替で役をこなしている。
芝居がはけると、（品定めをするように）、
審判官たる神は、芝居の良し悪しも、公平不公平も判断する、
人間の芸が正道にあって、

作者が満足しているかどうかをも。
　周知のように、頑迷で通俗的な意見の持ち主がいると、
王、司祭、奴隷、英雄たちの知見は
せまくなってしまう。
無神論者は法の権威を楯にする場合が多いので、
聖人たちに殺(あや)められる。
　ぼくたち人間のなかで最悪な者とは、
武装した真摯な君主と対極にある
似非(えせ)君主である。

〈解題〉

世界芝居に関しては、『形而上学』第三巻八章二節などでもカンパネッラは論じている。天の聖霊のまえで演ぜられる芝居を指しており、役者が舞台で役を果たすために仮面を被るように、霊魂が肉体の裡に隠れてしまう状態を意味している。四大（空気、土、水、火）に肉体（衣装）を返し、借りていた仮面を神に返却して終了する。聖霊たちは神の御許へと飛んでいく。芝居中、神は、役者の伎芸や科白の査定をする。

この詩全体のモチーフは、人間は各自、割り当てられた役をこの世（世界劇場）でしっかりこなすことにある。政治の場合、それは世界芝居の真似事にすぎない。ときに過ちをおかして惨事を招く。カンパネッラは、ダンテ『神曲』〈天国篇〉第八歌（人間それぞれ特質が異なることをテーマとしている）の末尾を引用している。

されば下界の現世にあっても、ひとびと、生まれながらの性状にしかと心をとめ、隋順怠らずば、その民はつねに佳良であろう。
しかるに見よ、そこもとたちの世界では、腰に剣帯びる生まれつきの者が無理やり司祭とされ、説法に向いた者が、王の座に就く。
これでは、そこもとたちの歩み、正しい道を踏み外すよりほか無し」。（寿岳文章訳）
ここはダンテがフィレンツェ時代、仲の良かったカルロ・マルテル（一二七一―九五年、コレラで二十四歳で死去）が、ダンテに語っている場面である。

16　真なる、過てる、寛大なる王と王国、その結末と究明

ネロ帝はたまさか風体が王だった。
ソクラテスは生来、真理を求めるひとであった。
アウグストゥスはソクラテスで、
ミトリダテス六世はネロ帝である、スピキオとヨセフスは半々か、
いずれにも値しないかである。
　君主が生まれながら統治出来るように、
ヘロデ王、メレート、そしてドミティアヌス、カイファ、
それにあらゆる悪質な権力者にも似て、
庶子という種を播く者たちを根絶やしにせよ。

その人物が利用価値ありとわかっている者は、
支配のためその人物を迫害する。
王国維持に武が必要な場合殉教者が出ることになる。
こうした支配はやがて死滅する。
専制君主や彼らの法が滅ぶのを見よ。
いまローマでは、ペテロやパオロが統括者である。

〈解題〉

ミトリダテス六世は、ローマと三度にわたって戦って敗北。前一世紀のことである。ヨセフスとは後一世紀のユダヤの歴史家。ヘロデ王（前七三頃―前四年）は、共和制ローマ末期から帝国初頭にかけてユダヤ地区を統治したユダヤ人の王。ヘロデ大王とも呼ばれる。ドミティアヌス（後五一―九六年・暗殺される）は、ローマ帝国第十一代皇帝。フラウィウス朝最後の皇帝。カイファとは、イエスの一連の言動を許さなかったユダヤ教の大司祭。

この詩には、どんな政治が真か、過ちか、寛容か、その議別が述べられている。カンパネッラは『政治箴言集』のなかで、生来の王、幸運によって登位した王、そのいずれか、その両方、その一部と分析している。たとえばマキァヴェリ的節度を似て、真の君主は庶子の根絶に力を尽くすこと――「そして、息子を捕まえ、ぶどう園の外にほうり出して殺してしまった」（〈マタイによる福音書〉二十二章の38）

つまり真の君主は、血で領国を守るものなのである――「わたしは羊のために命を捨てる」（〈ヨハネによる福音書〉十章の10）

一方、マホメットは庶子であり、殉教を拒んだ。本当の君主というものは先代の死の後も君臨するものなのである。マホメットの場合、何らかの真実めいたことを言うので支配力を持ち、その罰の割には、彼は好運に恵まれた君主とされる。

17　王国を有する者は王でなくて、統治出来る人物である。

刷毛（はけ）や絵筆を手にする者は色を塗りたい場合もあろうが、
壁や紙を汚してしまうだけだ。
絵描きはそうでない。
画家とは、絵の具、筆、パレットがなくても、技能を持っている人物のことである。
修道士は頭巾（ずきん）を被（かぶ）ってもいないし坊主頭でもない。
それと同じく王たるひとも大きな領地や系閥を持つに及ばない、
すべてを有する者とは、生まれが奴隷でも人品卑しい者の息子でも、
イエスでありパラスでありマルスである。
みずから王であると知るため外衣をまとうべきだと考える百獣の王とちがって、人間は頭に王冠を戴いて生まれてこない。
つまり共和国は国民に開かれていなければならない。
王国の王は、見かけ倒しの衣装や夢想にふけることなく，
白日の下で洗礼を受けた徳性を

あまねく身にまとうのが先決である。

〈解題〉

パラスは女神アテネ、マルスは軍神を指す。

カンパネッラはここであたりまえの事例を挙げて、統治する人物が王でなくて、統治能力と意欲を持っている人材であることを述べている。パラスとマルスは人間的思慮分別と軍事力に長けている。イエスは、神的徳性と神智そのものである。こうしたものを欠く人物は王ではない。魚や蜜蜂や小鳥とちがって、えらや羽やとさかなどの冠を頭や背に載せて人間が生まれてこないなら、このことじたい人間の生きる場が共和国であるのが便宜上よい証(あかし)なのである。というのも、自然世界は人間に王という存在を与えなかったからである。換言すれば、人間は装飾や王冠や世襲制を目的とすべきでなく、聖なる英雄的行為で勇武や徳性を明らかにして、そののち、王へと選ばれなくてはならない。

※「世界劇場」と「世界芝居」について――14で「世界劇場」という言葉が出てきて、今回15で「世界芝居」が出てきた。劇場で芝居は行われるから、これは〝場と行為〟の関係を表わしている。芝居の中には喜劇もあるし悲劇もあるのは言うまでもない。

「世界劇場」は、il teatro del mondo（14）

「世界芝居」は、la comedia universale（15）

というイタリア語で表現されている。del mondo と universale は交換可能で、ともに「宇宙」をも意味する「世界」の形容詞（句）である。14の〈解題〉でも書いたが、「世界劇場」は聖書に由来していて、ヨーロッパに昔から存在

した考え方である。

「世界全体はひとつの舞台であって、／すべての男ども女どもは唯の役者にすぎぬ」（シェイクスピア『お気に召すまま』）にあるとおり、人間は神によって操られている、自己の役目を演じている、という発想である。つまり、世界は生きている人間の喜劇あるいは悲劇の場としてみなされていたのである。

喜劇とは、面白くおかしいことも必要だが、劇が大団円で終了することを言い、悲劇は結末に亀裂が生じる劇を意味している。

ダンテ『神曲』は至高天でダンテが見神することによって大団円で幕を閉じる。原頴は、Divina Commediaである。ボッカッチョの『デカメロン』八日目第三話は、こっけいだが結末にひび割れが露見される、悲劇の代表例であろう。ユーモアがブラック・ユーモアに一転する作者の筆の冴えは見事というしかない。

「世界劇場」については、フランセス・イエイツ（藤田　実訳）『世界劇場』（晶文社、一九七八年）が参考図書として挙げられるが、残念なことに英国中心で、カンパネッラは登場しない。

※聖書の引用は、これまでもそうだったがこれ以降も、「新共同訳」を用いる。

18　われらが主なるキリストに

いまの世のなか、あなたを信ずるひとびとは、
あなたのために十字架に掛けられたひとよりも、
御身を十字架に掛けた者どものほうに似通っている、

善なるイエスは、全く流浪の身で、みずからの思慮分別を見定めた方である。
不節制、悪口、背信、そして中傷は、
頗(すこぶ)る尊敬に値する聖人たちの心に、常軌を逸した苦悩、恐怖や悲嘆の罠(わな)にかけようとして、着々とはびこり出している。
〈〈黙示録〉に苦痛などあまりない〉
御身にとって悪い知人・友人どもには、ぼく同様に武器を。
心を読めばわかるものだ。
ぼくの人生と受苦は、つねに御身の徴である。
よしんばご降臨の機あらば、主よ、武具で身を固めて来られよ。加うるに、十字架も必ず携えて。敵は、ユダヤ人でもトルコ人でもない。
ここ、キリスト教徒の王国である。

〈解題〉
おのずと明らかな内容である。おそらく革命蜂起を企てたが失敗して逮捕されたカンパネッラが、最終的な拷問の直後（一六〇一年夏）に書き上げたと思われる。キリスト教の信徒たち（当局）が、往時の迫害者とそっくりの状態になっていると嘆じている。神の適切な配剤が必要なのである。

19　キリスト、昇天のとき

死は、太古から罪を犯した者の報酬で、
娘の嫉妬からでも下されるものであり、
税を支払わなくてもいただける。
尊大この上なく不節操な獣、蛇と同族である。
　キリストの王国そのものが
最強者である全能者に屈服して、
最期は疲弊の極みにいたったとは思いたくあるまい。
過てる国家理性が死を育んでいる。
　キリストに役に立つためでなく、キリストに仕えるためには、地獄へと落ちよ。
死は武装し、戦場を選ぶ。
キリストの十字架像を揚げても、嘲笑(わら)われよう。
　生あれば滅亡あり。
死あれば、死して腑分けされた肉体から、神聖な光が抜け出して行く。
この世の闇はもはや避けられない。

〈解題〉

キリストが、死に瀕しつつもいかに死に打ち勝ったかは、神学者のあいだで知られているが、カンパネッラは、自分固有のオカルト的感覚がなければ、死を宣言しない、と言う。死こそ生の永遠と死の勝利に変容するものなのである。それでも詩人の気持は救いの女神を求めつつある。

20　我らが主、キリストの墓の中で――信仰なき者たちへ

おお、おまえは全体よりも一部、人類よりも自己を愛している、
無思慮のままに善を追い求めるのは、
おまえの劣悪な国に腐敗の実が生まれているからである。
　ここに律法学者や偽善者は全く完膚無きまでに壊滅し、
宗派それぞれが、人間を超えた至高の善の力で、
信心を奪われ世俗に還っていく、
そのあいだ墓のなかでも神を信じない者には崩壊が訪れる。
　摂理しかないのだと思え、
天や地や他の美しい事物をなおざりにし、
それらがなくても生きられるのか。
　愚か者よ、なぜおまえは生まれたのか。
深慮と神がおられるのはそのためなのだ。

考えを変えなさい。
星辰を率いる者に対抗しても屈服するばかりだ。

〈解題〉

19から22までの四篇は、一六〇一年の復活祭の時期の作である（獄中）。聖パオロは、〈ローマの信徒への手紙〉第六章23で、「罪が支払う報酬は死です」と述べており、〈知恵の書〉第二章24でも、「悪魔のねたみによって死がこの世に入り、悪魔の仲間に属する者が死を味わうのである」。『形而上学』第Ⅶ巻第五章六節で、カンパネッラ自身も同様なことを記している。

このソネットは、人間の創った国家理性、マキャヴェッリ的な、精神性の稀薄な思慮分別で生きている者たち全員を説き伏せるにふさわしい明晰、敬虔、叡智にあふれている。いつもこの世では、事を成すよりも不正に苦しむ方がよしとされる。自分であれ自分の子孫たちであれ、世界を支配したい無信仰の者の欲望によって、悪人どもはすぐに破滅して、統治者から忘れられていく。

21　キリストの聖墓のなかで

聖墓のなかからだと、不死なる神智が、
驚くほど無限であることがわかるのは、
人間が、（おお、聖なる愛神エロス！）で身を纏（まと）った肉塊であろうとも、
天使になるからである。

神は肉体が滅び死して埋葬され、
それから勝利の生に向かい、天に昇られた。
生きて神とともにあるならば、公明正大な情愛に抱かれるであろう。
　理性に燃え滾(たぎ)って死ぬひとは、
詭弁家や偽善者、それに僭主たちを打ち斃(たお)し、
人間たちに悪事を働く者たちを、崇拝する神に代わって薙(な)ぎ倒す。
正義が死ぬと不敬虔な生物が罪を受ける。
　そうでなければこの世のあらゆる悪業を裁く法が定められ、
その更正の律法によって、
ついに最後の審判が行われるのである。

〈解題〉
このソネットの主題は明白である。注意と遵守、認識とキリストの真似びの大切さを詠っている。

22　キリストの復活に際して

人類のために苦しみを拒まず、
艱難辛苦(かんなんしんく)の数年ののち、
キリストが六時間も十字架に磔(はりつけ)の刑にさらされていたのだから、

天はキリストに不死を賜った、
　その御姿をあまねく見ていても、
理性の力があれば、さまざまな拷問のあいだ、
絵に託すことも説教でも伝えることが出来よう。
　悲しみの世界を悪意に満ちた一撃で終わらせてよいのか。
天上界で愉悦にひたり、地上に、神の御名に値する栄光と威徳をすぐさまもたらす偉大な王国をなぜ語ったり書いたりしないのか。
　ああ、しもじもの者たち、大地にはいつくばり、
予想すらしていなかった大勝利が訪れるなら、
太陽は
激しい戦いの日をねらい撃ちせよ！

〈解題〉

このソネットは、磔刑になったキリストが復活しないのをつねに内心願っているひとびとを叱責している。聖ベルナルドゥスの『復活祭の説教』にも同じ内容が記されている。

カンパネッラによれば、善人を天上の栄誉に招く終末論的復活のまえに、一時的であるにせよ、キリスト教が、人類との統合一致へ回帰することで、充足の場を世界にもたらし、さらに、ローマ教会の政治的勝利と地上での生活が無垢・長寿・原初的神智へと還っていく事態が起こるだろうと考えている。カンパネッラの改革行為はすべて、自分

の打ち立てた原理（つまり円熟期の大作〔『想い出される事ども』、『神学』で論ぜられた霊魂（アニマ）〕に基づいた世界の継承をめざしている）。『神学』でこの部分はもっぱら、第二十七巻であつかわれている。